手塚　元彦
TEZUKA motohiko

stage.4

「取手の川辺」

何年後か何十年後かに私は死を向かえる。
安らかに、そして穏やかに死んでいくために、懐古の一つとして取手の川辺を自転車で走っていた日々を思い出すだろう。

小田　薫
ODA kaoru

stage.5

「ひきしお」

この街で生活して１年。
桜に見とれる間に春が過ぎて
いつもより早く夏が訪れた。
水着で道を行く人、
ココナッツの甘いにおい。
首筋にまとわりつく潮風。
日焼けした肌が落ち着いた頃
広く高い秋の空に
富士山が大きく見える。
今日も浜をゆっくりと歩く。
私が海にいる時はいつも
おだやかな、ひきしお。

藤川　真由子
FUJIKAWA mayuko

stage.6

「Back」

不器用

で　強がり

な背中

です

中嶋　明希
NAKAJIMA aki

stage.7

「揺籃」

《蛾の繭》をモチーフにした揺籃（ようらん）とは・・・「ゆりかご」とか「幼児期」「ものごとの発展のはじめの時期」という意味。

取手市は、大学一年の基礎科時代を過ごした自分の揺籃の地。
私は、ここ取手市で大きな蛾をよく見かけた。

太田　彩子
OTA ayako

stage.5

「夢の跡」

人はいろいろな夢を見ます。
しかし、その望みの果てに出会うものは、かたちを変えたなにかだったりします。
人はいろいろなものをつくります。つくっては壊し、壊してはつくり、
そしてその果てに出会うものは、どんなかたちをしているのでしょうか。

白村　聡二
HAKUMURA soji

stage.6

「flexible」

この夏、アメリカに行ってきました。
次は、タイに行ってみたいです。
無数の選択肢がある中で、自分が選んできたことを信じたいと思う今日この頃です。
この作品が、自分への起爆剤になってくれることでしょう。

渡辺　五大
WATANABE godai

stage.6

「駅前健康彫刻」

公共的な場所に置かれる公共的な作品とはどうあるべきでしょうか。駅前というごくありふれた日常の場所を行き交う人々に対して作者の私的な感性をただ提示するという作品ではなく、全く別の考え方が必要だと思いこの作品をつくりました。
しばし背中や腰のツボを押し当ててみて下さい。駅前の喧騒の中でも、不思議とリラックスできることと思います。

永井　理明
NAGAI yoshiaki

stage.7

「雨しずく」

雨の日、
家の中から外を見る。
ガラス越しの世界は
雨しずくにおおわれて、
見慣れた景色を
一変させた。